

## 宮本元駐中国特命全権大使講演録

皆さん、こんにちは！

私は日本に帰ってきて3年以上経ちますが、中国をやっております時には自分の意見というものを公の場で発言することを控えてまいりました。それぐらい中国問題というのは日本国内で神経質なんですね。敏感な問題でございまして、日本の社会、中国の社会、日本における中国問題、中国における日本問題はそういうふうに神経質にならざるを得ない、簡単に著しく感情的な問題になるんですね。

したがって、軽々に発言して、正確に伝わらない場合、日本政府に迷惑をかけるし、何よりも任命権者である外務大臣、総理大臣にご迷惑かけるので、自分の発言を意識的に抑えてまいりました。発言する時に全部外務省の公電の形で、私の意見として、外務大臣、総理大臣に申しあげました。違う意見でありましても、それははっきり申しあげました。それは内部の話でありまして、外に出る時には政府としてきちんと決まったことを言うのが大使の任務です。意識的に発言を抑えてきました。

大使を辞めてから、考えてみれば私も日本国民の皆さん方の税金でいろんなことを経験させていただき、いろんなことを学ぶチャンスを与えられたわけでありまして。そうであれば、辞めたから自分の仕事は終わりということではなくて、できるだけ、国民の皆さんへ私が認識する中国、日中関係、更にどういう政策が日本の国家、社会にとって正しいか、私の考えているところをより多くの方にお伝えるのが私の任務であろうと考え、そういうふうに努力してきました。

おかげさまで、日本全国で津々浦々とまでは言えませんが、いろいろなところで私の意見を発表するチャンスを与えて頂き、そこから一番強く感じたのは、いかに日本社会で、正確な中国、日中関係についてのイメージが持たれてないかということなんです。

今、ご紹介したとおり、私は外交官です。外交官はリアリストなんです。現実主義者です。現実の中で、物事を動かして、結果を出すのが私たちの任務であります。別に素晴らしい未来を夢想して、書物を書くというような仕事じゃございませんから。私たちは現実で生じたこと現実の中で解決していく。そういう観点から相手を眺める訳です。美化する訳でもなく、突き放して自分の仕事の対象として中国を見て、その中国にどういうふうに付き合ったら、対応したら日本という国家にとって一番いいのか、これを考えるのが我々の仕事です。

そういう言う観点から日中関係を考えて来たのです。それを国民方に申し上げますのと、宮本の話は新鮮だった、今まで、そういう話を聞いたことがない、中国の立場に立てば、そういう見方もできるんだ、よくわかりましたと言われます。私にとって当たり前のこと、常識中の常識、別に奇をてらっているわけでも何でもなし、自分が現役の時、中国を眺めて、私が認識する中国像を国民の方々にお伝えしたら、新鮮、新しいと。

私が見ている中国のことが世の中に伝わってなかったということなんです。だから、いかに日本の社会が抱えている中国、日中関係のイメージは私が見ている現実と違うのか。逆に言うと日本社会だけの問題ではない。中国でも全く同じ状況が起こり、中国のことをこれから話しますが、中国共産党というものが自分の統治を続けていくために、日本を一つの固定

化されたイメージとして国民に刷り込んだ方がいい局面があるものですから。それを一生懸命にやった結果、中国の中でも現実と全くかけ離れた、そういう日本、日中関係というイメージを中国の国民社会が持っているわけです。

2006年に北京に行って、日本の研究者40~50人集めてもらって、懇談会をやった。そこで、私は研究者の方に言った。私の皮膚感覚で言うと、日中の間の問題と言われているものは70%が誤解、もしくは理解不足に基づく。70%ですよ。私の話が終わって、東北大学で6年間研究終わって帰ってきたという50代の研究者が私のところ来て、「宮本さん、70%ではなく80%です」と。日本をよく知っている中国人、中国をよく知っている日本人はそういう感覚なんです。中国はけしからん、中国はなんだと、皆さん方がいうことの70%、80%が実際そうではないですよ。

中国ではもっと高い。中国の勉強不足ですよ。日本の方がまだ。中国はもっと偏っていますから。従って、そういう作り上げられたものだから、日本と中国は実際に本当に戦うなら、戦うしかないでしょう。そうであれば、外交の敗北だと思う。国家の宿命とか、どうしても動かし難い、そういうことがありますよ。

人類の5,000年の歴史を見ると、我々がいくら逆らったって、国と国が衝突して、戦争することは無数にあったじゃないですか？どうしても衝突しなければならないというならそれはやるしかない。私はリアリスト、現実主義者ですから。しかし、7割、8割ですよ。自分たちがそうじゃないと思う理由で戦争するなんて、そんなバカげた話はないというのが私の率直な感想です。ちょっと待ってくれと、いい加減にしてくれと。何を騒ぐのですか？それが私の素直の気持ですよ。ですから、今日は私が考える日中関係に関してご説明できる機会を与えて頂き、大変ありがたいです。

中国を眺めていく時に基本は中国共産党が統治する国ということですね。当たり前のように聞こえますけどね。8,500万人の中国共産党員があらゆる組織空間におるんです。そして正式な共産党員3人がいた場合、そこで組織を作ることが義務づけられる。

ですから皆様方の会社が中国に進出したとする。従業員が500人いたとしましょう。その中に3人共産党員がいると自動的に共産党の組織ができています。そして、3人なら3人、5人なら5人、10人なら10人の共産党員が会社組織の上層部、北京であれば、市の党委員会の管轄下には入り、党の指導を受ける。つまり、あらゆるところに中国共産党の組織が張り巡らされている。

ですから、体でいうと頭脳と神経系統を中国共産党の組織が担っているわけです。

中国共産党がどう考えて、どのようにあの国を動かしていくかということを理解していくことが重要となる。いろんなことを言うが彼らは我々より、いち早く、深く、広く中国の状況を知り、尚且、どうしたらいいかと考え、対応を打っている。

中国崩壊に関する本は山ほどありますが、その中で、崩壊する理由、中国がだめになる理由を独自に調査しているとすればすごいことです。大部分の崩壊論の事実関係は、全部中国共産党が発表したものです。年間20万件の抗議集会があると中国共産党は発表している。20万件ということでショックを与えてしまい、翌年から発表しなくなった。しかし、一回発表していますよ。発表する時に、その時の原因、どういう対応策をとるか考えた上で発表してい

るのです。それぐらいだものじゃない組織が中国共産党です。だから、今日まで、中国をこういう状況に持ってきている。

もう一つは中国の政策を考えていく上で、一つの方程式を私は作り出した。今日に至るまでのその適用は可能です。

### **経済の成長 + 社会の安定 = 中国共産党統治の維持**

即ち、中国共産党は今いろんな意見はありますよ、多様化していますから。しかし、唯一のコンセンサスは共産党の統治を続けること。理由はどうかと、中国共産党統治を維持することです。中国共産党の統治をするために何をしなければいけないのかというと、まず最初に経済成長させながら、いろんな問題を解決していくしか残った道はない。止まったら、中国共産党はおしまいです。社会が大混乱したら経済が成り立たない。社会を安定させて、そして経済成長の環境を整備していく、この二つが非常に重要になっていく。

そういう観点から中国を眺めていくと、全部解けていきます。何で、こんなおかしな政策を取るんだよと。今の方程式を当てはめたらいいのです。

そして、成長と安定は場合により矛盾します。中国の政策がすっきりしないのがこの二つを同時に達成しようとしているからです。経済成長を一生懸命にやろうとしたら社会の安定を損なうこともありうる。格差が拡大しているから。純粹の経済だったら、格差が拡大してもしょうがないですね。社会の安定を損ないますから、一生懸命に安定化のために、例えば不動産の価格を下げたりする。不動産が上がれば上がるほど地方政府にどんどん財源が入り、経済成長のためならいいんですよ。上がりすぎると庶民が住宅を買えなくなり、社会不満が起こる。だから、経済のために抑えているものではない。社会安定のために抑えている。あんまり抑え過ぎると今度は地方政府の財源がまさに破たんしてしまう。そうすると中国経済の成長が全体落ちていく。そういう微妙な駆け引きの中で、不動産価格とか、土地の価格とか、住宅の価格とかを彼らが考えている。

第18回の党大会は2012年開催した。そこで、胡錦濤さんが辞めて、習近平さんが就任。そこで一番大事なことがはっきりと確認された。それは鄧小平さんが言ってきたことをもう一回やろうと皆が決めたこと。これまで、経済成長中心にやってきたから社会の格差、問題が起こった。所謂左派の連中が胡錦濤、温家宝を批判したが、その先頭に立って批判したのが薄熙来でした。明確に中国共産党の中で路線闘争がありました。

私は公使時代に北京で香港に出版された一冊の本を読んだ。内容は鄧小平がいかにして江沢民を教育して、立派な中国の指導者にしたかという内容。それは江沢民の周辺の連中が誰かを使って、ペンネームで香港の新聞に定期的に書かせた。それをまとめて一冊の本にした。狙いはその時、江沢民の名前がまだ確立されていないので、江沢民という人間はこんなに鄧小平から教えを受けて、立派な指導者になったと内外に宣伝するためであった。それを読んでいると私の頭の中にいくつかのことが整理された。

要するに鄧小平はどういうふう江沢民を教育しておきたかったのか？  
私は三点あったと思う。

(1) 人民解放軍を掌握しよう。江沢民は私はちゃんとやっていると言う。しかし、鄧小平がまた足りない。將軍にてをあげるとか、いろんなことを江沢民は一生懸命にやっ

るつもりでしたが鄧小平はまた足りないと言う。

(2) 中国共産党を凌ぐような、中国共産党に脅威を与えるような組織、政党は中国に現れないだろうと。中国共産党は最強の政党であり続けると。しかしながら、党が分裂すれば共産党の統治もそこで終わる。くれぐれも党が分裂しないようにしようと。中国で問題が起きている時は、全部党が割れている。文化大革命がそうだった。天安門事件もそうでしょう。そして党が割れて、中国が不安定になった時に、中国を安定化していくのがいつも人民解放軍です。だから人民解放軍を味方にするのがものすごく大事です。

(3) 鄧小平は腐敗を挙げた。腐敗は共産党の命取りになる。腐敗対策をやれと言われて、10年、20年も一生懸命にやっていますがむしろ悪化している。こういう今の状況になるわけです。

ですから、胡錦濤の場合、ある意味恵まれていた。胡錦濤氏はずっと昔、1992年、鄧小平が次の指導者と見込んでいた趙紫陽が失脚した。その前の胡耀邦、趙紫陽この二人は本当に鄧小平の眼鏡にかなった人ですよ。自分の後継者としてやりたかったと思う。天安門事件で趙紫陽が失脚するわけです。それで、みんなと話をしておそらく、あいつはだめ、こいつはだめという議論を経て、積極的にあいつがいいでなく、消極的になかなか決められないので、最後にこいつしかない選ばれたのが江沢民です。そう言えば、1989年頃多くの要人が上海から杭州に遊びに行った時に、上海にいた江沢民は一生懸命にゴマすったという話をよく聞く。いずれにしても、1989年の天安門事件前後の対応が良かったということで、中央に抜擢された。

1992年に次の党大会が開かれる。その時に鄧小平はチベットのナンバーワンをしていた胡錦濤をですね。もう2,3番、大抜擢をして、政治局常務委員にして、そしてみんなの前で、これで安心だ、次の世代の指導者は江沢民で決まった、更にその次の世代の指導者も決まった、それが胡錦濤だと皆の前で宣言した。

ですから、鄧小平は江沢民の次は胡錦濤だと言って死んだのだ。もちろん江沢民にしてみれば、何で、胡錦濤に引き継げるんだというのがありますよ。機会を見て、胡錦濤を廃除して、自分の好みの人間にしたかったと思うよ。

しかし、胡錦濤が上手いのは、ナンバーツーを10年間、何の失敗もせずにやった。これは皆、会社やっていて、ナンバーツー程難しいほどポストないですよ。あんまり能力があるとナンバーワンから嫌われる。それじゃと言って、引っ込んでばかりいて、何もしないと能力がないと言われ外される。良すぎても、悪すぎてもいけない。中間のところ上手にやらないとナンバーツーは務まらない。それを胡錦濤さんは10年間ですよ。

そして、99年でしたね。法輪功がありましたでしょう。法輪功が中南海を取り囲んだ。1万人だったとされています。事前に公安が把握していたか分かりませんが、江沢民に上がってなくて、江沢民はパニックとなり、断固処罰しろと。しかし、李鵬と朱鎔基とか、まあ、いいじゃないですかと、そんなに気にしなくても。法輪功の中に人民解放軍OB、共産党のOBが沢山入り、知り合いの中にも法輪功の人間が入っていました。したがって、そんなに抑えなくてもいいじゃないかということ。そこで胡錦濤さんは「主席、それではやりましょう。」と、その場で明確な指示を与えたのが胡錦濤でした。

それで、やがて胡錦濤は軍事委委員会の副主席に抜擢され、軍事員会に入れてもらう。いずれにしても、2002年の政権交代にて、胡錦濤さんは鄧小平さんのおかげで無事なれたんです。御承知の通り、既定路線を変えることは物凄いエネルギーと理屈がいるでしょう。強いエネルギーと理屈がないと覆せないでしょう。したがって、胡錦濤のナンバーワン就任はそういうものでした。

今度の習近平は全くそうではない。ましてや、その直前に薄熙来がああいう動きをして、中国共産党は二つに割れるかなというそういう危機感の中での政権交代です。誰も次は習近平だと言うゴッドファーザーがいない中での就任です

実はこれは日本にも影響がありまして、そこに尖閣問題が嵌る。強い指導者を演出するために強い姿勢で尖閣問題に対処した。そのためには日本を悪役にすればするほど、中国のやっていることは正義で正しくなるんですね。徹底的に日本を悪役として描き、それに断固立ち向かう習近平。こういう構図を作り上げ、習近平の権力基盤の確立に使うとした、間違いないです。70%はそれが原因だと思う。いずれにしても、強い指導者を演じる。演じなければいかん程、政権交代がスムーズにいかなくなった。

したがって、胡錦濤の時代はですね。江沢民時代もそうですけど、大体鄧小平のラインでやっていけば、経済が成長して、そして中国はどんどん大きくなっていった。だけど、その結果、社会の格差の問題、皆さんは想像したらすぐ分りますが、1950年代から60年代、70年代、このあたり、日本も20年間高度成長時代だったんですね。あのときに我々自身いかに時代が変わっていったのか理解しているでしょう。急速に都市人口が増え、農村人口が減り、新しいコミュニティーができて、古いコミュニティーがなくなり、社会は大変動ですよ。それを中国は30数年続け、今も続けている。改革開放の平均実質成長率はほぼ10%ですよ。このスピードで経済が成長しているということは中国社会が激変しているということ。

ですから、社会は多様化し、いろんな要素が入り、中国社会を三つ、四つくらいに簡単に分けることが難しくなってきた。農村にも都市にも様々、いろんな種類があり、大学に行った人、行かない人、それもいろんな種類の大学が出てくる。したがって、価値観も、関心も、利益も全部多様化した非常に扱いにくい社会になってきた。それもインターネットという情報通信手段を手にしたわけです。そして、社会の構成員になった25%を超える人が今や大学に行くようになった。

即ち、情報知識さえ与えれば、自分で考え、判断できる国民ばかりになってきている。それを上から決めて、その決め通りに動けというのが中国共産党でしょう。

中国のあらゆるところで中国共産党の今までの統治の仕方が効かなくなっている。胡錦濤の時代、どうにかこうにかだましながらやってこれたんです。しかし、習近平は初めからそういういろんな問題に正面から直面して、それを解決しなくてはならない状況で、尚且つ、ゴッドファーザーがいないという状況で習近平政権は動き出した。

ですから路線はものすごく大事です。

もう一回鄧小平の経済成長に戻る。しかしながら、少し変えます。先に豊かになろうということで共同富裕、皆で一緒に豊かになりましょうと。ですから中国共産党はますます社会主義でないといけない。中国的特色のある社会主義、社会主義市場経済、社会主義は要する

に平等である。それを全面的に打ち出して、それに社会に近づけていかないと中国の共産党の統治は危なくなるという認識ですね。

中国共産党はですね、特殊な言葉が色々ありまして、なかなか難しいですが、皆で相談して、その過程において、みんなでやりましょうと。しかし、一度決めたら、実施する時には実施する人に権力を集中させます。

日本共産党も同じことを言っていますが、耳にされた方がいるかもしれませんが、民主と集中、民主集中性というちょっと訳が分からないものがあり、ですから、中国共産党という仕組みは権力を上に集中して、政策を決めるのはみんなで議論しますが、議論した後に権力を集中して、その人の指示で動く。これが中国共産党組織の特色なんです。ある意味で効果的です。ですから、いろんなところを改革をしないといけない。いろんなところで問題を正面から突破しないといけない。その度合いが強ければ、トップに権力が集中しないとけない。

胡錦濤さんはが2002年に天下を取った時、江沢民は心配になるわけです。自分がナンバーワンをやめたら、次の胡錦濤が自分に反旗を翻したら自分の一族のみならず、胡錦濤派と言われる何千万という物凄い人数の人が影響を受ける。江沢民派が、やれないようにと仕掛けを残して、自分の人間を中央指導部にたくさん残して、尚且つ、紀律検査とか公安とか、裁判所とかこういう関係も自分たちの影響力が残るような形でやった。ですから、胡錦濤は実際よりも、総書記の力がさらに制限された。あの人はなんだと、何もしなかったじゃないかと批判されていますが、逆に胡錦濤ができないように江沢民が権力を抑えたのです。その結果、問題は全部先送りとなった。

今、中国共産党のある種のコンセンサスはやはりトップにある程度の権力を与えて、そして問題を解決させよとそういう雰囲気になっている。ですから、実際に12年の党大会では政治局常務委員を9人から7人にした。司法、公安などを握っている人が政治局常務会に入らないようにした。

それがどうしたということですが、中国の場合、総書記は会議を招集し、主催するだけです。決定は集団決定、原則は多数決なんです。しかし、政治局常務委員はそれぞれ自分の任務を持っている。この任務に関して、一義的に責任を負う。

総書記というポジションは決定する力はないです。中国共産党の決定が効果・効力を発揮するのは、政治局常務委員会決定なんです。そうすると、政治局常務委員の人で、ある案件を担当すると政治局常務委員会が何回も開いて、初めて決められる。その場で担当する人は自分を弁護して、そして、多数決取れなかったじゃないかと。

政治局員が担当する部門を管理監督する政治局常務委員がいるんです。ですから経済とかそういう問題は政治局常務委員の李克強さん、国務院総理ですが同時に政治局常務委員です。政治局委員の副総理は経済を担当していますが、李克強はその上で指示する力がある。

公安、警察、政治局常務委員に入りましたら、総書記は何の発言権もない。みんなで、委員会で集団議決する時に君おかしいじゃないかと言えるわけ。しかし、今度下に入ったら、だれも政法を担当するというふうに政治常務委員に各メンバーの役割分担に中に入っていない。具体的に書いてないものはすべて総書記のところ来るのです。

即ち、9人から7人に減らしたということは、政法という司法、検察これを習近平は自分の下に置いたのです。これを認めたということは習近平に力がつくことをみんなが認めたということでしょう。合わせて、総書記就任と共に、中央軍事委員会の主席になった。江沢民も、胡錦濤も2年以上経って、初めて中央軍事委員会の主席になった。前任者がずっとそこに就いていたのです。

しかし、習近平に権力を集中させて、問題解決させる。そうしないと中国共産党は危ないよというのが中国共産党の中の一般的な雰囲気になってきている。しかしながら、これからの改革の全面的深化、これが三中全会、昨年11月の中央員会第三回総会のおける決定よね。改革の全面的な深化ですよ、テーマが。それは既得権益が山ほどあるということです。だから、改革を全面的に深化するためには、既得権益の連中をやっつけなくてはならない。既得権益の連中というのは大体高級幹部の子弟が多い。

これも、北京で聞いた話ですけど、1976年文革が終わり、そうするとたくさんの数の共産党の幹部が文革中に批判されて、その子供たちも下放され、ひどい目にあった。ついに四人組が打倒され、文革が終わり、そしてさんざん苦勞された、昔の幹部の連中が続々と北京に戻る。それで、党に行って、俺の子供をどうかしてくれと。要するに就職先を探せということですよ。

あのころの革命の第一世代、第二世代の方は大変元気でありまして、したがって、子供さんは何人もいました。習近平のお父さんだって、9人ぐらいの子供がいて、その全員に職を与えたら、幹部ポストがそれで埋まってしまう。そこで鄧小平は妥協して、ワンファミリー・ワンパーソン。要するに一家族に一人だけ採用してやると。最後は次官クラス、副部長まで面倒みようよ。残りの溢れた連中が海外に留学に行ったり、民間企業に勤めたり、人間関係を使って、大いにお金を稼ぐと。これがもっと強力な既得権益層となった。

したがって、習近平さんが天下を取って、権力を集めて、改革をやろうとするとそういう連中と戦わないといけない。なかなか難しい局面を迎えるわけです。そこで、習近平さんがやろうとしているのが次に書きました**三中全会による習近平の特色**なんです。

ある意味で共産党の原点に戻ることで打破しようということですよ。皆さんはくれぐれも間違えないようにして頂きたいのが、鄧小平は市場経済論者で、非常に合理的で、しかし、鄧小平理論はわれわれが理解している西側のリベラルな市場経済ではないですよ。鄧小平はもう最後の最後まで強固な社会主義者、共産主義者として死んでいる。あの人の夢は中国では社会主義を実現するということです。だけとあの人は黒猫でも、白猫でもネズミを捕れば良いという考えの持ち主ですから現段階において、社会主義初級段階という理屈を考える。本当にすごい人ですよ。われわれは何百年後に社会主義の夢を実現すると。しかし、農村革命からはいった中国革命が上手くいかなかったのは、社会主義は生産力が発展した最後の段階に現れるということをおぼえていたと言っている。

だから毛沢東さんみたいに明日にでも社会主義が実現すると錯覚したんだと。社会主義を実現するために経済を発展させなければいけない。社会主義初級段階は数百年も続くと言っている。最大の任務は経済力発展、そのために黒猫でも、白猫でもいいですよ、何でも世界中から役に立つものを全部使って、生産力をあげるということ。しかし、社会主義だという

点では鄧小平は一切動揺していません。

ですから、鄧小平が言う通りにやったからと言っても、中国はわれわれのような市場経済になることはないです。常に社会主義というものを意識しながらやっていかないといけない。中国的特色のある、と言うが、何が特色かよくわかりませんが、ヨーロッパとも違う、自分たちの社会主義を作るんだという。

しかし、国有企業の幹部が信じられないほどの給料を取っている。おかしい話だと、それが許されない。国有企業の給料制限を始めた。そもそも役人が毎晩毎晩茅台（マオタイ）の高級酒を飲んで、物凄い金の飯を食って、そんな時間があればもっと仕事しろということで、接待を受けてはいけない、茅台を飲んではいけないとか。これもこれもとやっている。賢いかなと思ったのが、やはり、会社なら会社、私も外務省時代に不祥事が起こりましたが、そういう不祥事が起こるのはその組織が弛んでいるということ。大体組織が問題を起こす時はそういう状況になっている。

JR 北海道の方がいらっしゃったら非常にあれなんですけども、やっぱり組織の雰囲気を変えないといけない。それではだめだぞと。これまではお金は勝手に収賄するし、付届けは喜んで受ける。宴会も勝手に人に払わせるというのが当たり前になっている。これは当たり前じゃないんだという雰囲気を浸透させようとしている。これは賢いと思う。小さいことから始まるとしている、また、本気だぞと。

いま、習近平はそういう八項目の禁止条項なんかを出した。それがちゃんとなされているか見回りがいるんです。私が聞いた話ですと、日本の人と食事する時、ある中年の女性が来た。どういう立場の人ですかと聞いたら、見回りですと言ったそうです。ちゃんと規則通りに宴会やっているかを現場でチェックしている。

そういうことで、要するに金をもらって、豪華な飯を食うのは間違いだぞと、中国共産党組織ではそういうことをやってはいけないということを取り戻そうとしている。それは毛沢東のやり方ですね。毛沢東は人民解放軍を作った時、要するに農民から一切ものを奪ってはいけない。家の中にさえ入らない。休む時には軒先で休めと。規則を決めて、その規則違反は銃殺ですよ。そして、人民解放軍の規律は物凄いものになったわけです。だから農民とか中国の一般大衆が共産党を支持したのは、人民解放軍は略奪しない、借りたら返すとか、物をもらったらお金を払うとか。それに違反することは厳罰です。だから似たようなものを行っている。そして組織を立て直す、締め直す。もうだらけてしまって、悪いことし放題のそういう共産党はだめだと、もう一回やろうと、ネズミと虎を同時に捕まえるという言葉を使っていますが、要するに悪いことをやっている者を全部捕まえると。小物であろうと、大物でもであろうと悪いことをやっている者を厳罰すると。

ですから社会主義を信じなさい、中国を救うのが社会主義なんだと。習近平は最近信仰ということをよく使っている。こういうことで締め付けて、そして、改革をこれから進めていこうと考えている。成功するかどうか誰にも分かりません。成功したらすごい話ですが、しかし、ちょっと弱みを見せ、後ろに引いたら習近平の改革は成功しないでしょうね。中国の人はじっと見ている、どれぐらい本気でやれるのか、またはその力があるのか、中国の党も、国民も眺めている。



伝統的な中国共産党のやり方であらゆるところを締め付ける。中国の共産党もう一度昔の党に戻そうとそういうことで腐敗とかを取り締まる雰囲気を作ろうとしている。

しかしながら、難しいのがその既得権益のことですが、習近平さんは早く成果出さないよね。江戸時代に偉い殿様がいましたね。綱吉だっけ、7代将軍、8代将軍？ 国民がいい加減にしてくれと綱吉さんが殴られたら皆が万歳と言ったじゃありませんか。だから、締める段階で、早い段階で終わらせないと、習近平のやり方もうまくいかないと思う。

それから、習近平のもう一つのいいところは、さすが長い間現場をやっているからプライオリティー、優先順位をつけて、段取りを決めて、プログラムを作ってやろうというこの発想法ですね。そして、改革の全面的深化を指導するスモールグループを作った。主任が習近平、副主任が李克強です。これが中国式なんです。

中国の縦割りというものは皆さんの想像を絶しますから。私たちが縦割りで、省益あって国益なしと皆様方に批判されますけどね、中国に比べればずっとましですよ。外国の人は日本の外務省に行って、厚生労働省に伝えてくださいと言ったら、僕はちゃんと厚生省に伝えますよ。

中国外交部に労働部に伝えてくださいと言ってもね、絶対に届きませんよ。要するに横で連絡するという習慣がないです。そして、どことも相談せずに自分たちの政策を決めて上にあげていく。上にあげて、例えば、外交担当の副総理が調整する。副総理が違ったら今度、国務院総理が調整する。ですからね、調整は勝手に自分でやるんです。

尖閣問題ですね、一時大騒ぎになった。彼らは自分たちがよくやっているということを示すために勝手にばらばらでやっているんです。そうすると誰一人として外交に配慮しながら海洋問題に対応しなくなる。

国家海洋局は与えられた規則法令の中に外交に配慮しようという内容は全くない。日本だって、海上保安庁の準拠している法律にも外交は入らない。国内の環境として配慮しなくてもいいです。それで言われたことをやればいいんです。尖閣は中国の領土だ、あそこで、自分たちが華々しい活動をすれば、中国社会から褒められる。来年度の予算獲得にもいいかもしれない。ということで各部門が競い合って、漁船といろいろな船が日本の海に入ってくるのです。

その結果、中国外交はどんどん後ろについていく。それでいかんということで、海洋に関する委員会を作った。日本の新聞は大体、海洋権益を更に守るため、中国が積極的に出ていくための体制を作ったという解説ですが、実態はバラバラの部門をコントロールしたいのです。各部門をコントロールできるための委員会です。それが一番実態に近い。

ですから、改革を全面的に深化するためのスモールグループ作り、習近平が主任になり、李克強が副主任なり、それで、先ほど言ったようにどれをプライオリティーとして決めるか。政府の役割に重点を置くのか、司法改革に重点を置くのか。やらないといけないことは山ほどありますから。

そうすると、その分野を実施するためのグループができるのです。調整しないといけないから。今は、一部分がやれることはありません。必ず他の部門に関係します。それを日常的に報告させて、そして予定通り行っているかチェックしながら進めていくのです。

中国では部門をまたがる場合、必ずそれを束ねるものがないとダメということです。新聞にも出ていましたが、国家安全委員会というのを作って、遂に中国は外に出ていく、日本のNSEに負けないように作ったという解説がありますが、実際はそれもあります、主に国内の治安ですよ。公安部、安全部、武装警察、人民解放軍が国内の治安を勝手にやっている。それを上で、国家安全委員会がやって、横の連携をちゃんと持たせながら一つの方向に国家安全委員会を被せる。しかし、この結果、面白いことが起こるのです。対外安全に関して、この安全委員会は議論していくことになります。これは習近平の更なる権力強化になります。

人民解放軍の問題は全部人民解放軍だけが扱い、他の連中に一切口出させないようにしていた。国務院総理は膨大な予算を国防予算から国防軍に回してやらないといけない。国務院総理でも軍に口を出してはいけない。全部中央軍事委員会が仕切る。12人ぐらいいましたが、習近平さん以外、残りは全員が軍人。

今は軍事安全委員会の問題も、科学技術の進歩で兵器が極めて高度化し、作戦も複雑になる。したがって、軍事・安全の専門化が急速に進んでいます。そうすると、中国軍人委員会に習近平が行って、誰からか説明を受けて、主席はどうですかと言われて、まあいいでしょうという話になります。それぐらい、よく分からないことになっている。軍事委員会の残りに人間が全部軍人ですからつるんでいる。

今度、国家安全委員会を作ったことにより、習近平は軍事委員会の主席として、例えば、航空識別権が上がってくる。今は100%人民解放軍が自分でやる。国家安全委員会ができたなら、これは対外関係も関連するから国家安全委員会で議論しようという決定ができる。そうすると案件は自動的に安全委員会に行き、外交部、国家安全もいればいろんなところがいて、アメリカの反応はどうだとか、外交部とか、安全部の連中が、いや大変なことになると思いますと報告する。人民解放軍はそんな話を習近平に絶対言わないから。

自分の悪いところを隠しちゃうことがあったでしょう。嘘をつく訳ではないけれど言わない。上から聞かれない限り、不利な話をあまりしなかったじゃない？ 聞かれない限り、同じことを連中がやっている。したがって、国家安全委員会を持つことで今度は人民解放軍が勝手にやる分が切れ、習近平が力強くなります。

そういうふうにして、非常に難しい時期を習近平が迎えている。その次に関心を持ちましたのが、習近平の革命は成功するかというところで、習近平の背景になります。習近平を考える時、父親の習仲勳の存在は物凄い。伝記が出まして、去年の生誕100周年の時に「習仲勳伝」という上下の本が出ました。中国の友人が読めというから読んでみました。そこで感じることはですね、習仲勳という人は本当に革命にすべてを捧げた人ですね。彼自身は大変貧しい農家の長男として生まれた。習家族は河南省にあって、そこで生活できない大飢饉が襲って、お爺さんの時に陝西省に行き、しかし、そこでもずっと貧乏な暮らしをした。それでも、中国は日本と違うなと思ったのが、そんな貧しい農民の家でも、自分の祖先に立派な人が必ずいるんですよ。あれは日本と中国の違いだと思いますね。ところが習仲勳の家が宋の時代、唐の時代とかにね、習何とかという人がいましたと言う。これがすごいと思った。生きるか死ぬか、貧乏百姓ですが、自分の先祖にああいう人がいたと皆に思い出させるんですよ。これは中国の社会と日本社会の違いだと思います。中国では誰でも皇帝になれると思っ

ている。

日本の天皇と違って、血統ではありませんから。明王朝の朱元璋、漢王朝劉邦だって、あれはヤクザの親分ですよ。俺の家からこういう人が出たと。私は一種のショックを受けました。中国ではどんな田舎でも、どんな貧しい人でも、千年まで溯って、自分はそういう家の出だというあの社会ね。

習仲勳の家ですね、習という家はああいう人間もいたと言われながら育っていくことの違いですね。初めから死ぬまで、お前はこういう宿命というより、頑張ればあのご先祖のような人になるよと教える。これが中国社会の強いところだなと思いました。

いずれにしても、習仲勳は大変貧しい家に育ちました。ただ、新しい息吹、清朝が壊れて、中華民国の時代になる。あの陝西省にも変化が訪れ、より、多くの子供たちが小学校に入るのです。

彼、習仲勳は小学校に入る。そして、高学年に入った時に、彼は中国共産党の青年団のリクルートというかそことコンタクトを取り、優秀な少年ということで中国共産党の組織を守っていく。したがって、習仲勳はそういうふうには純粋培養されて、自分の指導者の戦略が間違っていて、大変な目にあったことがある。そこで、彼は大変な能力がある人ですから。信念を持ってやっていたらうまくいくもの。そういう環境の中で、毛沢東の「長征」という、実際は蒋介石に追いまくられて、徒歩で2万数千キロを歩いたという。トラックなんかに乗れませんよ。昼間寝て、深夜に行軍する、それぐらい追い詰められていたのです。

いずれにしても、毛沢東の軍が逃げてきたのが陝西省でしょう。そして、あの有名な延安です。陝西省に元々いましたのが習仲勳です。そこで初めて、共産党の主流に合流することになる。

1976年文革が終わり、78年鄧小平の改革開放を始めた。1978年、即ち、鄧小平の天下を取っていく、鄧小平の王朝というよりは、長征に参加して、尚且つ文革で批判・攻撃された中国共産党員による王朝。習仲勳は長征参加組ではなく、地元組です。主流とちょっと外れる。大変な能力があるので、周恩来、鄧小平に可愛がられる。能力がある人に大変可愛がられる人です。しかし、習仲勳は調整参加組ではなく、むしろ合流に近い。したがって、太子党で既得権益で行っている人とちょっと違うのが習仲勳です。自分たちが本当に仲間と思っているかどうか。

一時、習仲勳は陝西省に残り、そこで、人民解放軍の政治委員になったりする。その後、北京に行くと、周恩来の書簡室の副秘書長の役職に就く。1962年に、自分の曾ての上司を弁護して、窓際にされる。それから文化大革命に入る。

ですから、習近平は8歳か、9歳の時にお父さんが最初の失脚をして、文革に入ったからお父さんから大事にしてもらった期間が短い。それが76年、78年まで続くわけです。

その後、お父さんが広東省に行き、改革開放後の広東省を立て直す。現在、習仲勳一家は深圳に住んでいる。その時の縁なんですね。そして、中央に戻り、中央弁公室室長などに担当する。その時のトップが胡耀邦なんです。胡耀邦がまた批判される。習仲勳はその批判大会に行って、たった一人で胡耀邦を弁護する。批判するあなたたちが間違っていると言ったのだ。そして、国会副議長になる。そして、天安門事件の時に、趙紫陽を弁護する。ここに

書いてありますように 2001 年に習近平は父親の 88 歳のお祝いに欠席した時にこんな手紙を書く：

「お父さんの人となりを選び、成し遂げたことを学び、信じることをあくまで追求する精神に学び、民を愛する精神を選び、質素な生活を学ぶことを誓っている。」

習近平もかなりそういう側面を持っているということですね。真正面から取り組んで、真正面からやろうとしている。失敗する可能性もある。

習近平は単なる表面のテクニックでやっていると思いませんね。私はですね、大使時代、安倍首相はじめ、福田、麻生と三大の高級幹部のお仕えしました。高級幹部子弟はいいなと思ったのがね、総理大臣なるのが目的じゃないですね、逆にいうと説得しやすいです。総理、これをおやりになりましたら、歴史がどう書くかという説得に弱い。いかに歴史を意識しているか。自分がやったことを歴史がどう書くか。それと同じく、習近平も自分がどういうふうに歴史に書かれるかを認識している。

しかし、彼は本気だということです。彼が成功できるかどうかは予断を許さない。

先ほど言ったように、権力をどうやって集中できるか。成果を早く出せるか。今は、鞭ばかり入れているから、人間は鞭ばかりだと嫌になっていくから。ですから、目に見える形で、具体的に成果が上がって、長い間、鞭ばかりだと、彼自身が危なくなってくるから。

一番の問題はこれだけ賢くなった中国国民、その人たちのためというなら、その人たちが政治参画することの道を閉ざしていること。今、ネットなんかで騒ぐと、党中央もびびりますからね。そういう意味では、国民は自分たちが参画できているという意識がない。社会保障を強化して行かないといくら日本の悪口を言っても、日本ばかりを敵にしても、ちょっとは役に立ちますが、中国の抱えている巨大な矛盾を国民の目からそらすことができません。そうすると、中国共産党が上にいて、統治して良かったとより多くの中国人に知らせないと統治が続かない。

温家宝は基本的なソーシャルセーフティネットを作った。システムは出来上がった。最低保障、医療保険、老人年金の問題。しかしながらそれがどれぐらい充足していくか。保険もみんな入りますが、政府は信用していませんから。どうせ、保険でお金を払っても、掛け金の半分ぐらいが悪徳役人のところに入るだろうと考えているから。

なかなか保険が普及しないのが問題なんです。全面的に教育して、少しでも、地に足がつくようにしている。中国共産党の巨大な挑戦は一人から千円集めても、1兆3億円になるのです。相当なことができる、しかし、一人に配るのも1兆3千億円。千円をもらって喜ぶ人はどこにもいません。一人1万円やろうとすると13兆円ですよ。

2008年、中国の国家予算は大体130兆円です。今は200兆を超えていると思う。いずれにしても、社会保障はパンドラの箱で、これで国民黙らせ、国民の関心を買おうとすると途端にそこに入って行く。人間は必ずもっと増やそうと思うよ。増やそうと思ったら、何兆というお金が簡単にいるわけです。1万円で13兆円ですから。そういうことから考えると中国の抱えている問題というのは物凄く大きい。

日本の場合、民主主義の制度が本当にうまく作ってあるなと思うのが権力をお互いにコン

トロールさせ、腐敗防止なんですね、相互監視で三権分立が出来上がっているでしょう。

また、中国はどうしてもうまくいかないのは、自分たちを監督するものは一切持たない。紀律検査は党の中に持っていますが身内ですから。身内はしっかり検査を出しても効きませんでしょう。外務省も不祥事あったけど、内部で検査できないよ。外務省はおかげさまで、今検事さんに来てもらって、監査をやってもらっている。

いずれにしても中国共産党は内部の検査しかない。したがって、自分たちがきれいになることができない。他方、社会保障で満足させるととてつもないお金が必要、それに中国の仕組みは頼れるかという問題。だけど、全部問題をわかっています、習近平の考えるのは重点ですね。

最初は市場配分における「市場の役割」でしょう。

次は財政、税制、取った税金をどうやって分けるかという話。

3 番目は農村の抱えている問題に関して、都市化を進めることで改革しようとしている。

4 番目は中国式の民主主義、いろんな人が参加して議論することで、民主主義的なものを作ろうとしている。これはあまりうまくいくと思いませんが。

5 番目は司法、いま、中国で一番の腐敗は公安である司法なんです。

6 番目はハンファイのメカニズム

7 番目はネット管理、習近平さんは心配なんです。中国共産党の決定の中にネット管理はあまり出てこない。

8 番目は国家安全委員会作ったことです。

9 番目は天然資源法。レアアースのことで、中国はけしからんと言っていますが、実態と相当かけ離れた皆様方の批判ですね。というのがとてつもなく多くの中小企業、場合により個人が至る所で大地に硫酸を流し込んで、レアメタルを取っている。ルールがないです。そしてどんどん値上がりし、儲かるという。中国は生産国になって、値段が下がる。無数の中小の業者なんです。この連中は環境に配慮することは全くしない。これじゃいかんということで、これをコントロールし、将来 5 社ぐらいの体制にしようとしている。輸出を止めれば、中小の連中は破綻し、潰せる。大きいところに集約できる。だから輸出禁止したのです。

それでは日本にはということで、尖閣問題が起こる前に 5 月か 6 月に経済産業省には今年には 70%削減する。日本には 30%しか供給しませんと言っている。尖閣が起こる前に言っていた。

だけど、中国にもう一人おかしい人がいまして、北京にいる新聞記者に囁く人がいる。北京では新聞記者も、私たちも 24 時間厳戒監視体制にあり、なかなか特別な人や情報を持った人には会えない。われわれのところに来て、習近平さん怒りましたねとか。上手く我々を情報操作しようとしている。その人たちが北京にいる特派員にだから言ったでしょう。尖閣でああいうことをするからレアアースの輸出を止めたとか。

その連中が言っている。商務部は一回も言ったことがない。言えば WTO 違反ですから言えない。日本関係は非常に危ない。慎重にやらないと自分が失敗するかもしれないということになる。そうするとみんな止めるのです。

私が大使時代に北朝鮮核実験のことがあり、安保理が一定規模の送金を禁止したことがあ

ります。何が起こったかという、中国外交部は安全保障理事会の決定を人民銀行に送るんです。安保理でこういう決定が出ましたので、皆さんよろしく。安保理決議というのは政治的な妥協ですよ。意味が曖昧に書かれる。その安保理決議の妥協を中央人民銀行に送るわけです。人民銀行も何の指示も与えずにこういうのが来たので、然るべく対応する。そうすると、現場の者が北朝鮮全部ストップです。何円以下が安全、何円以上が禁止というのがガイドラインを出さない。要するに高額はいけないと書いている。高額はいくらと書いていない。

そうすると新聞にも出ましたが、丹東という北朝鮮に近い町の人民銀行は全面的にストップとです。そうなんです。理由は危ないから全部ストップにしてしまう。レアアースも同じです。日本とこんなに問題になった時に、レアアースを日本に輸出をしたら、どうなるかわからないから、停めてしまうんです。

そして、日本関係を動かしても安全だと思って動き始める。そういうふうに囁く人がいるのです。囁くと日本の新聞はですね、中国共産党筋によれば、という書き方をします。

しかし、対外世論工作、それは違った情報も入りますよ。ナチの時代、スターリンの時代から世界がやってきました。違う情報を流して、相手を攪乱する。そういう連中が中国共産党ですよ。その連中が日本の記者に言って、共産党筋によれば、中国政府は日本に対する輸出を禁止したと。日本に対して、圧力かけようとしている。

結果として、中国というのが信用できない国だと、あの国と付き合うとき気を付けないといけないと全世界に浸透したからね。日本もやられたと、中国という国はこんなことをするのだ。

藤田組捕まったでしょう。しかしながら、捕まえられる根拠を藤田が与えたのですね。あれは、日中共同でやっている遺棄化学兵器の事業なんです。その時にちゃんと我々は公にして、この事業に関心がある人は申請してくださいと、そうすると、自分たちが調査できる許可を与えますというふうになっていましたが、藤田組の人は許可を取らずに軍事施設のところで写真を撮ったのです。

これは中国法律の違反になるわけ。中国当局は日本の誰かを捕まえようと思っていた時でしたから。

北京の総代表も言っていました。あの事件が起こってから、行動を著しく気をつけるようになったと。慣れた人は中国の法を違反することを一切やらない。そうするとまた、日本の世論に圧力をかけようと、それが仕事の人には囁く。前回、朝日新聞ですから、今度読売新聞を呼んでおくかと言いながら。

いずれにしても、そういう難しい社会を持っていることですね。

習近平はこれからどうなっていくか本当に難しいんです。中国の抱えている問題は確実に深刻化している。

しかし、同時に我々は見落としてはいけないのが中国共産党の統治能力も上がっています。経済の問題なんか、彼らの能力の進化のスピードの方が早いのでは？財政、金融、財務大丈夫ですか。負けるかもしれませんよ。もう最先端を学んだ人がどんどん欧米から帰ってきて仕事しているから。先ほど言ったように、民の心を掴もうとすると中国共産党統治の正当性の答えがまた出せず、常に脆弱なんです。

どこまでやっていけるかということで、習近平さんは今回の決定に掲げた重要案件について徹底的に改革をすると。しないと明日の中国はないと。そういうことからしますとね。外までカタカタしたくないですよ。

鄧小平さんのすごいところは経済の発展はあらゆる問題の解決するカギだと見事に見抜いて、あの人の頭の中にはそれ以外のすべても物は経済の発展に奉仕するように作ったのだ。

鄧小平の時の外交は簡単でした。国内の経済発展を可能にする平和で、安定した国際環境を作ること。それが外交の任務だ。そのための必要なのは外的環境を整えることが外交の仕事だと。ところが、ある段階から主権、領土という所謂核心的な利益が胡錦濤政権の終わりごろから出てきた。

これだけの大国になったのに、また、鄧小平がいう国内発展ばかりの対外姿勢をとらないといけないという中国人が増えてきて、核心的利益を断固としてやろうとなった。その結果、東南アジア、日本も周辺環境がガチャガチャになった。世界中から中国は怖い国だと、中国はやっぱりだと。そういう考えが広がった。これは中国の経済発展に影響してくる。グローバル時代の経済ですから。

そうはいかんからもう一回外交をまともな方向に変えよと 2013 年の 10 月に習近平は鄧小平外交路線に基本的に帰った。新しい価値観を出して、外交を進めようとした。そのあと中国は防空識別圏をやるのです。先ほど言いましたようにそれは人民解放軍がやったのです。今度いろんなところで、習近平は人民解放軍に手を突っ込んでいますから。人民解放軍の頭を殴るためにやったかもしれません。

習近平からするとそういうことで全部対外関係を整理して、これから、国内の方に専念しようとしていた時に安倍さんが靖国に参拝した。私のところに複数の中国人から習近平は激怒したという話がある。この人は日本の世論工作をやっているその筋じゃないから。私の何十年の友人ですが彼曰く習近平は理性を失ったと。国家指導者が理性を失うと何事だ、あらゆる時に沈着冷静にやるのが国家指導者の任務ではないかと言いましたが、習近平さんの気持を分らないでもない。

したがって、日本との関係をある程度安定させて、周辺諸国の関係を安定させ、同時に山ほど国内問題が待っていますので、それを一つ一つ権力統治しながら習近平は中国を変えていくというこの基本は変わりません。

私は安倍総理の周辺にも、外務省にも言っていますが、しかし、今回、中国いろんなところから聞こえてくることはもう中国側から動いて事態を改善することにならないよと。はっきり言って、中国はアメリカとの関係さえを押さえておけばいいでしょう。無理して日本とやる必要はないですよ。アメリカだってこれ以上日本が中国と韓国と話し合いをしないと、悪いけど、俺がやるよと、アメリカと韓国と話をして、この地域をどうするか相談に入りますよ。ですから中国からこれまでやってきて、これ以上ということは期待できない。

状況を変えるために日本側が動くしかないよということを強く言っています。だから、外交の値段が上がった。あれがなかったら、もう少し安い買い物とっては申し訳ないが、TPP もどうなるんですかね。TPP をまとめないといけない。アメリカに借金が増えたら TPP で返すしかない。国と国の関係は全部連動していますよ。これはこれ、あれはあれという世界で

はありません。だって、指導者同士の貸し借りになりますから。だから、起こったことはしょうがないが、現実主義者ですからね。今は安倍さんが靖国に行ってしまったという現実ですから、この現実からどうするのかというのが私の仕事ですから。ルールを考えていけないと思う。

私はですね、日本と中国はあまりに個別具体的なこと、歴史認識問題もそうですし、領土がらみの問題もそうですし、相手を十分理解しないまま、勝手に相手のことをイメージして、お互いにけしからんとやっている子供じみた状態は一刻も早く脱却しなくてはならないと思っています。その一つは冷静に両国関係を保つことは日本だけでなく、中国にとっても、日本との安定した関係を作るというのが彼らの最大の利益です。

グローバル経済を辞めますかということです。経済グローバルこれで終わるんですか？ 科学技術は無限に発展している。経済を変え、社会を変えていっていますよ。もう一回閉鎖になりますかね。そうするとみんなは生活水準を下げるといことです。

閉鎖は生活水準を下げることを意味しますが、われわれの原点はグローバル経済が続くというのが正しいと思うよ。グローバル経済と言っても 100%きれいな自由主義の市場経済はできないので、地域の経済がヨーロッパから始まり、今、どんどん広まっています。この流れも止まらないでしょう。そうすると大きなところで経済の相互依存はまた深まると想定したらいいのでは？

しかし、同時に軍事、安全保障、今日に至るまで変わっていません。これは大昔の日本人が、軍事安全保障を独特の世界ととらえてきたのだ。それはこちらの隙を見れば、相手はこちらをだましに来る、そういうことを考えるのが当たり前なのが軍事安全保障の世界なんです。皆さん方の関係で言えば、会計法規と同じですよ。相手を信頼していたら会計法規は一切できません。それをいかに阻むかということだと会計法規ができています。軍事安全保障も相手が悪いことをするという前提で、考えられていることですね。

日本と中国の間、これを専門にする人がどんどん多くなっている。何が起こるかという、軍事安全保障の基本は、最悪の事態を想定して対応する。軍事安全保障はプロの任務です。相手のことは 100%分らない。分らない部分で、最悪の想定し、事態を考えれば、必ず相手の実態よりもこちらは過剰に対応する。こちらが過剰に対すると向こうも過剰に対する。そして、行く先は軍拡競争です。軍拡競争の行く先は米ソ冷戦でソ連崩壊以外全部戦争で終わっている。だから、この考えに日中が乗ったらわれわれの将来は暗い。

日本の軍事安全保障の専門家に再三言っていることは、あなたたちの想定した軍事安全保障の世界は経済がこんなにグローバル化してないでしょうと。相互の経済がこんなに密接になっている時に、何を守るべきなのか？ 軍事安全保障の考え方をもう一回変えてくれないかと。根本的に変えて、そして人類の共通の利益、共通の何かが出て来るので、それを守るために軍事安全保障の発想法を考えないと日中関係のいいことは一つもないと言っている。

ですから経済に莫大な利益を中国関係で我々は持ち、同時に莫大なマイナスの関係を持ち、それをいかにバランスさせるかが政治と外交の任務と考える。この中の一番いいバランスを取るといことしかない。しかしながらそのためにも、私は日本も、中国も、韓国も、そしてアメリカもですね、どういう東アジアを作るのか。これをもっとお互いに議論すべき。19



世紀、20世紀の発想ではなく、日本と中国はこの東アジアはどういう、大きな国も、小さな国も、平和共存できて、共に安心できる仕組みをどう作るか。

そんなに難しい話ではない。我々は国連憲章に合意している。加盟国になっているから、国連憲章にわれわれは約束したのが武力を使わないということです。そこまで人類が進歩しているのに、今、中国と日本は一体何をやっているのかと。東西冷戦、戦前の発想になっていますよ。これは世界中から何をやっているのかと思われているよ。韓国は少年漫画展で、慰安婦問題を出してみたり、それは韓国のためにもならない。要するにこういうことで日本と韓国、中国がこの程度ですかと見られているということですね。

先ほど紹介したとおり、私は1990年代の初めごろ、イギリスの戦略研究所にいた時、カナダの東アジアの研究者、今は亡くなられている方がいまして、彼は東アジアの国々は自分たちのことをうまくやれないから、われわれが第三者として面倒を見ないと東アジアの安定は保てないという。東アジアの専門家の「わりに、東アジアの言葉を何も喋れない。英語しかしゃべれない。私から「あなたは英語で言って、英語でばかり調べるからそうなるんだ。」と言ったが。

日本で英語をしゃべる人は中国を嫌い、また、中国で英語をしゃべる人も日本を嫌いなんだと。そういう人とばかり話をするから日本と中国は上手くいかない。われわれは同じ東アジア人、われわれの伝統的な価値観、西洋文明に破壊された、そういう共通の痛みを持っていることを忘れるなど。

あなたたちには見えない共通の物を持っている。説教は結構ですと、東アジアのことを自分たちで処理できると言いましたが今の状況はどちらが正しいでしょうか。恥ずかしい限りですよ。自分たちのことを処理できないということは子供みたい。一体何をしているのかということです。いずれにしても、少なくとも現段階では、日本はこの三つの国の中では最も成熟した社会を持っていると確信しています。

日本が大人の対応を続けていくべきだと思います。その時は、確実に国際的な支持は日本に來ますよ。その時、正義は日本にあると思わせなくてはいけない。それと反することは内閣総理閣下くれぐれもやめてほしい。石原慎太郎さんもう二度とああいうことをやらないでください。石原さんの国有化で今回の尖閣の問題は日本が仕掛けたということになっているよ、国際世論では。平穩だったのが日本が仕掛けて問題を起こしたと。その後、中国の対応があまりにもひどいもので、中国の方がおかしいというように国際世論がなりかかったところで安倍さんが靖国に行ってしまったね。

これから中国は確実に日本よりどんどん強くなっていく。大きくなっていくので、そういう中国との関係をやっていくのに我々は常に正義の立場をとってゆくと。国際社会を味方につける。日米安保のことばかり言う人に対して言いたいのは、正義がなかったらどうなるのか、ということ。安倍さん靖国に行け、中国が来たら日米安保があるからと言う人に僕は聞きたい。そんなことをやっていたら、アメリカ国民が自分の子供たちの血を流すことを許しますか？日米安保があるからといって、日本が仕掛けた紛争にアメリカの若者が命を差し出すことを認めますか？アメリカは民主主義であり、アメリカ大統領は戦争権を発動する時に議会の承認が必要。議会は世論を反映するのです。その人たちの心を掴めないで、日米安保

があるから日本は安心です？ 冗談じゃない。

だから我々の行為は常に正義、国際社会においても、日本が正しいという正義の道を歩かないと日本のこれからの将来は危ないということです。ですから歴史問題の認識にしても、戦後の基本的な秩序、それは日本軍国主義が打ち負かされたものです。連合国から打ち破られて、そして、ニュルンベルグと東京裁判でそのけじめをつけて、それを踏まえてサンフランシスコ平和条約があつて、戦後の国際秩序ができたというのが国際社会の基本認識なんです。これに挑戦したら正義は絶対に日本に来ませんよ。

僕は読売新聞に書きましたけど、歴史問題はそういう現実の外交と切り離してくれと。今は外交問題が国内問題になるのです。国内問題とは今生きている有権者が彼らの価値判断で決めるのです。この人たちは歴史学者ではないから。

いくら自分が正しいと言っても、正しいかどうかは今生きている世界中の人が決める。それが外交問題です。勝てませんよ。

今日、女性もいますが慰安婦の問題も勝てますか。強制があつたかなかつたかと、なかったからそれでいいということになるんですか？今生きている価値観では、そうはならない。そういうことを自覚して、国際的正義は自分たちにあるということを作り上げながら、われわれは非常に厳しいけれど、日本として一步一步、自分たちの国の安全と繁栄のためにやっていかなくてはならないと思います。

ご清聴ありがとうございました。